

現地農業情報（沖永良部島・与論島）令和5年7月

（1）奄美農業を語る会で活発な意見交換

7月10～11日に和泊町で「奄美農業を語る会」が開催され、奄美地域の経営者クラブ員、地元生産者代表、関係機関・団体職員63人が出席しました。会議では、各島代表3人の方が、輸送コスト対策、機械の有効活用、さとうきびハカマの有効活用など離島特有の課題を克服して経営に取り組んでいる事例発表を行いました。経営事例発表後に参加者から多くの質問があり、有意義な意見交換が行われました。今後とも、地域農業の課題への対応について、関係機関と連携して取り組んでいきます。



（2）畑かん営農推進協議会総会を開催

6月23日に和泊町やすらぎ館で沖永良部島畑地かんがい営農推進協議会総会が開催され、委員と幹事、畑かんマイスターなど約30人が参加しました。総会では、令和4年度の活動実績報告や畑かん実証ほ場でのさといもの収益向上について紹介されました。また、今年度は、各専門部会で営農ビジョンの検証やアクションプログラムの見直し等を検討することを申し合わせました。今後とも関係機関と連携して、畑かん営農の推進を図ります。



(3) 畑かんマイスターを7人に委嘱

6月23日に和泊町やすらぎ館で沖永良部島畑かんマイスター連絡会総会が開催され、畑かんマイスターや関係機関など12人が参加しました。総会では、令和4年度に取り組んだ畑かん営農の事例を紹介後、委嘱状が交付されました。令和5年度は、7人（退会者1人、新規加入者1人）の畑かんマイスターが関係機関と連携した畑かん営農推進活動や地域農業への波及に取り組むこととしました。



(4) さとうきびの単収向上に畑かん推進

7月12日和泊町、13日知名町で、畑かん営農推進研修会が開催され、農家や関係機関など合わせて約50人が参加しました。研修会では、R4年産さとうきびの低収要因の説明後、徳之島支場の講師から、さとうきびへのかん水効果や「はるのおうぎ」の特徴について説明がありました。梅雨明け以降、まとまった降雨がない状況が続いていることから、畑かん利用に向けた格好の啓発の機会となりました。今後、さとうきびの単収向上に向け、積極的な畑かん利用が期待されます。



(5) 沖永良部島の新規就農者を励ます

6月29日に知名町立中央公民館で、令和5年度新規就農者励ましの会が開催され、4人の新規就農者と和泊町、知名町の両町長をはじめ、関係機関、指導農業士、農業青年クラブ、女性農業経営士など約60人が出席しました。会議では、新規就農者支援の各種施策や支援体制等の紹介、農業青年クラブの活動紹介、新規就農者としての抱負発表の後、両町長による励ましの言葉をいただきました。今後、これを機会に新規就農者への支援を円滑に進めていきます。



(6) 与論町で農産加工の基礎を学ぶ

7月5日に与論町で農業大学校主催の「令和5年度農産加工基礎研修（入門コース）」が開催されました。午前中の室内研修には、29人が参加し、農産加工の基礎知識、食品衛生、県内優良取組事例紹介などの講義があり、うち10人が、午後から農産加工基礎研修として、「いしかた（与論町在来柑橘）」ジャムのびん詰め、「島らっきょう」浅漬けのフィルム包装を実習しました。今後さらに農業大学校との連携を密にして、新たな加工品などの生産振興を図っていきます。



(7) 与論版さといも疫病対策 I P M等でさといも産地の復活に期待！

6月29日に与論町のさといも疫病対策実証ほ場で、新技術現地検討会を開催し、約20人の参加がありました。参加者は、昨年度農業普及課が開発したさといも残渣の簡易処理法の実演を見ながら、①残渣処理、②種芋の水選別・一斉消毒、③ドローンによる一斉防除を組み合わせた高齢農家でも取り組める「与論版さといも疫病対策 I P M」を学ぶとともに、疫病抑制効果に強い関心を持っていました。今後、当 I P Mや省力化技術の利用拡大で、さといも栽培面積の拡大が期待されています。



(8) 与論地域トルコギキョウの課題を検討

与論町のトルコギキョウ栽培は、温暖な気候を生かして、冬春期に無加温で出荷されています。7月12～13日にJAあまみ与論事業本部で、生産者、関係機関・団体計12人が参加し、トルコギキョウ生産振興検討会が開催されました。栽培課題を解決するため、関係機関と連携して、今年度は作付計画や販売データを分析するとともに、自家育苗の実態調査を行い、品種ごとの収益性指標や自家育苗体系暦を作成することとなりました。農業普及課は、農家の経営安定のために今後も支援します。



(9) 若手キク生産者がキク産地枕崎や曾於地域で意見交換

6月27～28日に沖永良部花き専門農協の青年部が、県内のキク産地である枕崎大塚地域やJAそお鹿児島管内を初めて視察研修し、生産者や花き関係機関・団体と意見交換をしました。枕崎の室内・現地ではお互いのキク生産の特徴（沖永良部は平張・露地栽培、枕崎はハウス栽培）について活発に意見交換ができました。また、曾於地域では、現地視察でスプレーギク高単収技術等の取組を検討しました。今後は、枕崎生産者が2月に沖永良部に来島し、さらに産地間の交流を深めることになりました。



(10) バイヤーと花きのマーケティングについて意見交換

7月5日に知名町フローラル館で、えらぶの花マーケティング研修会が開催され、生産者や関係者等26人が参加しました。福岡・東京のバイヤーからは「アフターコロナ、変化する花き需要に向き合う（ブライダル編、量販編、ショップ編）」というテーマで取組が紹介されました。産地からは流通改善の取組や博多でのPRイベントの報告を行い、最後に今後のえらぶの花に関する意見交換を行いました。今後もブランディングやPR等の活動を、国内外のバイヤーと連携しながら進めます。



(11) スプレーマムスマートフラワー規格での出荷実績が好調

令和4年度（令和4年7月～令和5年6月）からスプレーマムがスマートフラワー規格で全量出荷されていますが、前年と比べて出荷本数は約6%増、平均単価は約12%高、予想相対率は8%増と過去3年間で最も良い成績となりました。実績が好調な要因は、需要期12月、3月出しよりも7～9月出しの生産量、平均単価が向上したことが考えられます。生産者は需要期の安定生産への意欲がさらに高まっており、引き続き生産安定を支援します。